



発行 浄土真宗本願寺派 稱 讚 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

二〇二二年度 稱讚寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

ぶつしょうぎだいいち
仏光照曜最第一

こうえんのうぶつ

光炎王仏となづけたり

さんず こくあん

三途の黒闇ひらくなり

だいおうぐ きみよう

大応供を帰命せよ

『浄土和讃 讃弥陀偈讃』

ロシアのウクライナ侵攻から半年が経とうとしておりますが、一向に改善に向かっておりません。日本の夏と言えば、広島・長崎の原爆をはじめ、戦争の愚かさと悲惨さを思うと同時に、“亡くしたいのち”“奪つたいのち”を見つめるときでもあります。それなのに、世界は、日本も含めて軍縮どころか防衛費増額にむかっているようです。日本の各家庭では、七月〜八月に



二〇二二年七月一〇日 永代経法要

かけて、新暦旧暦のお盆（盂蘭盆会）が営まれます。

仏説では、目連さんが亡きお母さんを探したら、餓鬼道に落ちていて、救わんと努めるのですが、どうすることもできませんでした。そこで、お釈迦さまに尋ね、雨季があがった日に僧侶が“失つたいのち・奪つたいのち”に懺悔しているとどこにお供えをしないと説かれ、目連さんはそのとおりしたら、お母さんをはじめ、七代前の有縁の方々が救われていきました。後に目連さんは、お釈迦さまに後の世の人たちも私と同じようにすれば、救われていくのでしょいかと尋ねると、お釈迦さまは大いに喜ばれて、頷かれたそうです。（盂蘭盆会を歓喜会とも言われる由縁です）

一見、目連さんがお母さんたちを救う話に受け取られますが、ここにはもう一つ、実はお母さんたち先人が、仏さまとなって目連さんを諭し救っていたことが説かれています。

懺悔する僧侶にお供えする行為が、現代



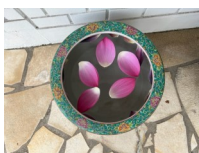
永代経法要 7月10日(日)

〈参拝〉 安達光成さん・高橋八重子さん
中木原乃既子さん・早崎光弘さん



歓喜会法要 7月16日(土)

〈参拝〉 安達光成さん・高橋八重子さん
中木原乃既子さん・山田昌三さん・住職姉



旧暦のお盆前ですが、稱讃寺 盂蘭盆会法要 日時 8月11日(木) 14時~16時

日時 九月二十五日(日) 午後二時
講師 赤松秀敏先生
講題 グリーフ・ケアについて
(東京都済生会病院医師)

記

のお盆やご家庭のご法事に形として残っているのだろうと思います。
ご先祖を尊く思い、感謝し、幸せでありますようにと願うところは善きことなのだろうと思いますが、そこには、いついつまでも生前のその方を思いやつのことで、仏さまに成られたとは受け取れないでいるのだろうと思います。
本来、「供養」とは、「仏さまに値する方として敬う」ということです。私の亡くなった身内、近い方、先人先祖の方々を偲ぶところには、その方々が仏さまとなつて、私を見守り導いておられることであります。その方々の仏さまと成られたのちを通して、阿弥陀さまのご本願に遇わせていただくことが、「ご法事(仏事)なのでしよう。阿弥陀さまを「大応供」と言われるのは、最も供養するに値する方ということとであります。どの法要も「仏徳讃嘆」と心得たいと思います。
稱讃寺では、八月十一日に、旧暦のお盆(盂蘭盆会)法要を行います。
また、秋季彼岸会を左記のように執り行いますので、ご参拝ください。

現世利益和讃について

九首目

なもあみだぶつ

南無阿弥陀仏をとなふれば

えんまほうおうそんきよう

炎魔法王尊敬す

ごしょう みようかん

五道の冥官みなともに

よるひるつねにまもるなり

【意訳】

お念仏を称えんと、

地獄の炎魔法王も尊敬する。

地獄・餓鬼・畜生・人間・諸天など迷いの
世界の在任をとりしらべる冥土の役人たち
もみな共に、

夜昼常に念仏者を護るのである。

【出拠】

『金光明経』巻三「鬼神品」第十三

釋提桓因及び日月天、閻魔羅王・・・常に
世間を護り昼夜離れず

(『三帖和讃ノート浄土和讃篇』豊原太成師編著)

ARTNE (アルトネ)

天か地獄か、死者は十人の王に
裁かれるーエンマと地蔵菩薩ー

【レポート】二〇二二年八月七日

福岡市博物館（福岡市早良区）で九月十五日から十一月四日まで、特別展「浄土九州ー九州の浄土教美術ー」が開催されます。そこで同博物館で、福岡ミュージアムウィークの一環として講演会「地獄の主役…エンマと地蔵菩薩ー九州は浄土・京都は地獄ー」を五月十九日に実施。講師は京都の龍谷ミュージアム教授の石川知彦さん。仏教で説く死後の世界「地獄」と「浄土」をテーマに、閻魔王の成り立ちや変遷、地蔵菩薩の役割などについてユーモアたっぷりに語りました。石川さんのお話を要約して紹介します。

地獄はまるでテーマパークのよう？！

「最近地獄ブームになっていきます。なぜかというと、地獄はけっこう面白いからです。それに対して極楽浄土はつまらない。地獄はまさにテーマパーク。見る分には絶対楽しい」と石川さんは切り出します。

「キリスト教では地獄の反対は天国で、仏教の地獄の対極は浄土。いろんな仏様や菩薩が住んでいる浄土へ行くというのが、地獄に落ちることの対極になるのです」。仏教において人間の最終的な目的は、人間として悟りの世界に目

覚めることであり、そこに向かって努力し、最終的には悟りの世界に入ることだと説明します。地獄は行きたくない、なんとか極楽往生したい、というのが一般的に日本人が持つイメージかと思えます。「死ぬとどうして地獄に行ってしまうのでしょうか。仏教で死出の旅路の時に草履を履かせたり、杖を棺桶に入れたりするのには、意味があります。人が亡くなると、まず死出の山（死天山）を越えることになります。これを越えること自体が大変なことで、旅支度が必要になるのです」

天か地獄か、死者は十人の王に裁かれる

死後の世界では、十人の王がいて裁判官のように裁くという話には興味津々。「死天山を越えたら、さっそく十王の一人が出てきます。一番手は、秦広王（しんこうおう）。結果的に極楽往生する方も、地獄に落ちる方も、ここから審判が始まります。そしてみんなが針の山を越えるのです。この山を越えるために草履が必要です」。

この山を越えると、二番手の初江王（しよこうおう）が出てくるとか。その王の裁きの前に衣領樹（えりようじゅ）という木があり、その木の元に奪衣婆（だつえば）と懸衣翁（けんねおう）という人間の姿をした鬼がいて、着ていた服を奪衣婆が剥ぎ取り、その服を懸衣翁が衣領樹の枝に掛けるといいます。「枝のしなり具合で、罪の重さが測られるのです」。

「この後、裸で三途の川を渡ります。三つの渡り方があるので三途といえます。一番罪が軽い人は橋を、悪さが少なかったひとは浅瀬を渡ります。一番罪深い人は激流。大蛇、竜などが

うようよいるところを泳いで渡ることになります。子どものうちに亡くなったときは、賽の河原に連れて行かれ、そこで石を永遠に積み続けます。」

三途の川を渡ると、三番手の宋帝王（そうていおう）、四番手の五官王（ごかんおう）が続くと説明。五官王が持つているのが「業のはかり」という天秤です。「一方に重しが付いていて、もう一方に亡者が載せられ、地獄行きかどうかが決まります」

閻魔王は五番目に登場、いわば地獄

その後、五番手に出てくるのが、私たちも知る閻魔王。「忌日と十王は関連があり、一七日（初七日）で秦広王、五七日で閻魔王が登場します。七七（四十九）で極楽に行くのか、あるいは地獄を含む六道輪廻に戻されるかが決定します。但し、六番手の変成王（へんじょうおう）、七番手の泰山王（たいざんおう）は、今の裁判所に例えると高裁と最高裁。地獄で最初に判決を下すのが閻魔王です。本来は七七日の法要よりも、三十五日目の五七日できつちりと法要しないと、まともな判決が出ないことに」。地裁、高裁、最高裁という分かり易い説明に、思わず納得です。

「地獄は六道の一つ」と六道絵を示し、一番悪いのが地獄、次が餓鬼、畜生、阿修羅、人、天と説明します。「天は、天国ではなく天人や天女が住む所です。天に行ったとしても必ず衰え、やがて死を迎えます。そして一からやり直します。動物に生まれ変わるのが畜生、阿修羅は人ですが、一生戦いに明け暮れる。この六つをぐるぐると回るのが、六道輪廻、六道輪廻か

ら脱却して浄土に行けるかどうか決まるのが、五七日の閻魔王の裁き。最終判断を下すのが七番目の泰山王です」

十王の八番目は百か日の平等王、九番目が一周忌の都市王（としおう）、十番目は三回忌の五道転輪王。「なぜ居るのかというと、再審請求ですね。最終的に三回忌のときに、行き先が正式に決まるのです。十王の中心にいるのは閻魔王です」。浄土に行くにも、地獄を含む六道に行くにも、十王が関わっているのですね。

世界最初の人類で最初の死者が閻魔？

一方、閻魔王は、中国で生まれたそうです。「閻魔王は、元をたどると、インドの焰摩天（えんまてん）に行き着きます。焰摩天はサンスクリット語でヤマという人です。ヒンズー教の聖典リグ・ベダに出てくる人で、世界最初の人類で、当然世界最初の死者になった人です。死後、死者の国の王となったのです」。

最初はヤマの国は死者の楽苑でしたが、生前に罪を犯した者を罰する神と認識されるようになり、またヤマ自身が死の象徴と考えられるようになったといえます。「このヤマが仏教に取り入れられ、焰摩天になって死の国を支配する王と位置づけられ、天界と地獄世界の主だとインドの仏教では考えられています。この焰摩天が中国に渡り、閻魔王と名前を変えていきました」

優しい顔立ちの焰魔から怖ろしい閻魔へ

インドで生まれた焰摩天。これが密教で十二天に組み込まれます。「十二天とは四方八方、それに天、地、日、月。これらを守るそれぞれ

の神様です。焰摩天は、南の方角を守る神様になります。代表的な作例が京都の醍醐寺に伝わった木彫の焰摩天です。絵画ではより古いものが残っています。奈良県の西大寺の十二天。これも水牛にまたがっています。平安時代後期になると、同じ十二天でも全く違った姿になります。鳥獣にまたがらず、台座に変わります」

独尊としての焰摩天についても説明が続きます。「滋賀県にあるMIHOミュージアムが収蔵する焰摩天の独尊は、牛の背に片足を踏み下ろして座っています。焰摩天が中国に伝わり、そして日本でどんどん姿を変えていくわけですが江戸時代に作られた栃木県の西明寺の閻魔王座像は、目が白く、髪はパスタのようにねじねじになっています」

「優しい顔立ちをされていた焰摩天。日本では奈良時代から平安時代を通して、室町時代、江戸時代まで描き継がれるわけですが、焰摩天がだんだん閻魔王に変わっていく姿が見られます。曼荼羅で変容を遂げていることが分かります。焰摩天の部下からだんだん姿が変わっていくのです」。

テーマパークのような地獄の世界に導くのに、閻魔王など十人の王が関わっていることを知りました。仏教絵画や彫像もたくさん紹介され、これらに表現された時代とともに変わっていく閻魔王の姿は大変興味深いものでした。

※今回は文中「地蔵菩薩は十王の上に立つ尊格」については、省いております。次号にて「閻魔王が尊敬することについてとあわせて地蔵菩薩についても掲載いたします」。

親鸞聖人御誕生八五〇年

立教開宗八〇〇年 慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

④兼実と弟たち

兼実が誕生した時、父忠通はすでに五三歳でした。以後、二年ごとに男子が誕生しました。道円（どうえん）、兼房（かねふさ）、慈円です。すぐ下の弟の道円は出家しました。彼は当初、兼実がもつとも期待した弟でしたが、二〇歳で早死にしました。次の弟の兼房は従一位太政大臣にまで昇りました。しかし兼実が兼房をあまり評価していませんでした。兼房は正治元年（一一九九）に出家引退しました。兼実が土御門通親のために没落させられている最中でした。そして建保五年（一二一七）に亡くなっています。でも兼実は兼房の息子兼良を養子として引き立て、正二位権大納言にしています。またもう一人の息子兼円を慈円の門弟にしています。その慈円は兼実の六歳年下の弟でした。二人はずっと仲がよく、兼実の没後も慈円は九条家を盛り立てることに尽力しています。

⑤慈円の両親の没

保元元年（一二五六）、慈円は二歳で母をうしなしました。そして長寛二年（一一六四）、今度は一〇歳で父をうしなしました。慈円の初期の和歌に、次のような和歌

があります。両親に対する思いを詠んだ和歌です。

たらちねも 又たらちめも うせはてて
たのむかげなき 歎きをぞする

「お父さんもお母さんも亡くなってしまう、頼りにすべき人たちがいない悲しい気持ちを味わっています」。また次の和歌もあります。

みなし子の たぐひ多かる 世なれども
ただ我のみと 思しられて

「親をうしなった子の例は、世の中で多いですけれども、それは私の場合だけなのではないかと思うくらい悲しいです」。

⑥慈円の出家

永万元年（一一六五）、十一歳の慈円は覚快法親王の室に入って道快と称しました。覚快は鳥羽天皇の第七皇子で、青蓮院を開いた行玄の門弟でした。ここに慈円と青蓮院との結びつきが始まります。

慈円は、翌々仁安二年、十三歳で出家しました。戒師はその時の延暦寺座主である明雲でした。慈円は翌年から三年間、まず密教を学びました。その三部の大法と呼ばれる『大日経』『金剛頂経』『蘇悉地経』を受け、護摩などの行法を行っています。安元二年（一一七六）、二十二歳の時には比叡山の無動寺で千日入堂を行いました。無動寺の本尊は不動明王です。不動明王は大日如来の化身と言われています。慈円は煩惱を征服し、乱れる心を抑え、その上で

極楽往生を願いました。戦地に入堂の時の心境を歌った和歌があります。

三年まで みのりの花を ささげつつ
九品（このしな）をも願ひつる哉

慈円は、治承三年（一一七九）の春三月二十四日、二十五歳の時に千日入堂を終えて京都に戻りました。以後、翌年の十二月に至るまで、隠遁の道に入りたい、聖ととも生活して自分にとってのほんとうの修行をしたい悩み、兄の兼実に訴え続けました。しかし周囲の説得により、また聖はしばしば尊いように見えるが実際はそうでなかったと理解したことにより（多賀宗隼『慈円』吉川弘文館、一九五八年）、比叡山に戻りました。自分のためではなく、世のために生きようと決心したのです。

【連載 親鸞と慈円と青蓮院（3）】 ①慈円、青蓮院の門主となる。

養和元年（一一八一）春、親鸞は九歳で出家しました。が出家した年です。『親鸞伝絵』に「九歳の春比、阿伯従三位範綱、前大僧正【慈円 慈鎮和尚是也。法性寺殿御息、月輪殿長兄】の貴坊へ相具したてまつりて、鬢髪を剃除したまひき。」とあります。【一】の中は注（割注）で、【一】「前大僧正」とは慈円のことで。慈円は藤原忠通殿（法性寺殿）の息子さんで、九条兼実殿（月輪殿）は一番上のお兄さんです【一】という意味になります。「月輪殿長兄」は、正しい文法的読み方からすれば、「九条兼

実殿の一番上のお兄さんです」ということになりま。文法的には誤りですが、あまり考えずに文を作ったのでしよう。

この『親鸞殿絵』によれば、親鸞は慈円のもとで出家させてもらったということになります。親鸞を出家させる役、いわゆる戒師は慈円であつたことです。ただ従来から説かれているように、親鸞が慈円のもとで出家したかどうかについては疑問が残されています。

慈円が青蓮院の門主（住職）となつたのは、親鸞出家の半年後です。二七歳の時でした。慈円は、この年には僧侶の最高位である法印に叙され、三昧院と成就院という有力じいんの検校（住職）を兼ねました。その三年前の二四歳の時には法性寺の座主（住職）にもなっています。父の忠通が出家した寺です。三二歳には宇治の平等院の執印（住職）となり、翌年には法成寺（藤原道長建立の寺院）の執印となつていま

す。西山の善峰寺も手に入れています。これらは仲がよかった兄の九条兼実の尽力によるものです。この後、青蓮院だけでも全国にわたる百数十ヶ所もの莊園・寺院・神社を配下に収めていきました。

また慈円は天台宗と比叡山延暦寺のトップである天台座主に四回も就任していきま。つまり慈円は大莊園領主として経済的また政治的に大勢力を得ていったのです。

②慈円と承元の法難の証空と親鸞

建永二年（一二〇七）、浄土真宗でいうところの承元（建永）の法難が起きました。後鳥羽上皇が熊野参詣中、女官二人が専修念仏者の念仏の会に参加し、上皇に無断で出家してしまったことに憤激して念仏者四人を死罪、他の八人を流罪にしてしまった事件です。この八人の中には専修念仏者の責任者としての法然や、門弟の証空も含まれています。

従来、この事件は国家と既成教団が支配体制を揺るがそうとする専修念仏者を弾圧したものだとされてきました。しかし実際のところ、原因はそんな大げさなものではなく、まだ二八歳と若かつた後鳥羽上皇が、愛人二人の無断出家に怒つたことである（上横手雅敬「建永の法難について」同氏編『鎌倉時代の権力と制度』思文閣出版、二〇〇八年）ということだったようです。

この承元の法難で法然は土佐国に流され、親鸞は越後国に流されました。ところが慈円が証空の身柄を引き受け、流罪は免除された形になりました。そのことをと後に本願寺蓮如は次のように書いています。蓮如書写の『歎異抄』奥書です。

幸西成覚房、善恵房二人、同流罪にさだまる。しかるに無動寺之善題大僧正これを申あづかると云々。

「成覚房幸西と善恵房の二人は遠流に決定しました。しかしながら、慈円（無動寺之

善題大僧正）が申し出て身柄を引き取り、流罪を免れました」というのです。

この時代の「あづか（預る）」というのは、現代とは異なる意味が含まれていますが、現代では所有権は移りませんが、この時代は「あづかる」で所有権が五〇パーセント以上一〇〇パーセント近く移動するのです。完全に一〇〇パーセントではありませんが。これは、一つの莊園に、上から本家―領家―地頭または領所―名主という四人の領主がいるようなものです。この場合の「領所」も現代的な意味で領地を預かっているのではなく、領主として収入を得、また年貢を収集する権利を持っています。有力者が「あづか」れば刑を免除されるなんて、現代から見ればおかしい法習慣です。しかし当時はあつたのです。

証空は慈円に保護され、建暦二年（一二一一）慈円の譲りを受けて京都西山の善峰寺北尾往生院（三鈷寺）に住むようになっていきます。それで証空が固めた念仏の教義を西山義といいます。

しかし承元の法難において、慈円は親鸞を「申あづか」つてはくれませんでした。

自分が出家させてあげた人間だから、重大な危機には救うのが当然だろう。しかし救うことは、慈円は親鸞の戒師ではなかったのではないか？という意見があります。

③親鸞と法兄聖覚

吉水草庵においての親鸞の法兄に、聖覚

という人物がいます。彼は承久三年（一二二二）に『唯信鈔』を著しました。法然の専修念仏説を理解するためには信心が重要であるという主張が説かれています。親鸞はこの書物をとっても重要視しました。

『親鸞伝絵』によれば、吉水草庵において、親鸞は法然の門弟たちに信不退・行不退の二つの座に分かれて入るよう提案したといひます。念仏は信心に基づいて称えるのが重要か、多く称えることが重要か、という問いかけです。何百人もの門弟たちが決めかねている中で、聖覚は真つ先に信不退に入った一人でした。親鸞も法然も信不退に入りました。親鸞と聖覚は念仏について共通した理解を持っていたのです。

また聖覚は、法然が亡くなつてから六七日（四二日）の法要で追善の文章（「表白」）を読みました。後に親鸞はその一部を引用して恩徳讃を作っています。

このように親しい親鸞と聖覚でしたが、聖覚は一面では親鸞とかなり異なる世界に住んでいました。

④聖覚、青蓮院の慈円の傘下に入る

聖覚の祖父は少納言藤原通憲、出家して信西入道と名のつた人物です。彼は後白河天皇の幼児の養育にあたり、可能性がなかった天皇即位を実現させ、保元元年（一一五六）の保元の乱で後白河

に不満で挙兵した崇徳上皇を倒しました。次の平治の乱では討たれ、乱が静まった

後、十七人以上いた息子たちのうち、十二人が流されるといふ結果になりました。しかし後白河は大恩ある通憲の子弟をすぐ赦免し、その後大いに引き立てました。

聖覚の父澄憲も信濃国に流されたのですが、まもなく京都に戻されました。以後、京都の安居院（あぐい）に住み、唱導で天下一とされました。唱導とは、法要の場での説教、法話のことです。そして僧侶では最高位の法印に叙せられ、権大僧都にもなりました。

聖覚も安居院に住み、父の後を継いだ唱導で日本一とされました。法印にもなっています。彼も後白河法皇の庇護下にあつたといふべきです。そして誰から譲られたのか不明ですが、元久二年（一二〇五）には桜下門跡領と総称される一〇ヶ所近くの荘園・寺院・神社群を領地として持つていました。聖覚はその支配を確実ならしめるためでしょう、青蓮院の慈円に寄進しました。慈円はその寄進を受け、改めて聖覚に支配を任せました。すなわち、桜下門跡領は、青蓮院領になったのであり、同時に聖覚領でもあるという状況になったのです。一般的な支配関係でいえば、本家（青蓮院・慈円）―領家（聖覚）―桜下門跡領という形になります（拙著『親鸞聖人と箱根権現』自照社出版、二〇一五年）。この場合、実質的な支配権限は聖覚が持つていたようなので、これも一般的な言い方をすれ

ば、桜下門跡領の本所は聖覚であつたといふことができます。「本所」とはその実質的支配権を有する存在のことです。

元久二年といえ、この年の四月に親鸞が法然から『選択本願念仏集』の書写と閲覧を許されています。信不退・行不退のきごとの時季は不明ですが、聖覚はもうこの元久二年の段階で明確に慈円の保護を受けています。その上での吉水草庵への出入りであり、信に基づく念仏を受け入れていたのです。当然、親鸞もそのことは承知していたはずで、聖覚（だけではありませんが）が法然の門に入ったからといって、それは聖覚の生活の一部でしかなかったのです。

ちなみにこの桜下門跡領の荘園群に、関東の箱根権現およびその西に隣接した伊豆山権現（静岡県熱海市）も入っていました。

親鸞は、五十五、六歳のころに相模国に布教に入ります（拙著『五十六歳の親鸞・又統一相模国への布教』）。「関東の親鸞シリーズ」12真宗文化センター、二〇一五年。拙著『五十八歳の親鸞―相模国への布教・続―』同13、同年）。根拠地は稲田草庵に置いたままです。稲田から通つたといふことです。その中で、親鸞は再び聖覚に出会つたのではないか、少なくとも強く聖覚を意識するきかいがあつたのではないかと私は考えています。（次号に続く）

稱讃寺 行事予定

二〇二二年 八月の行事予定



六日(土)

のんのん法話会

休座

一日(水)

孟蘭盆会 午後二時

一六日(火)

のんのん法話会

休座

二六日(火)

のんのん法話会

午後二時

※八月十二日(金)〜十七日(水)

鹿児島・稱讃寺お盆法要の手伝いで
帰省いたしますので、留守いたします

な ひと
とき人が

わたし おぼろ

たし

私と仏法との 縁となる

二〇二二年「心のともしび」八月カレンダーより

「ウクライナ緊急支援募金」募集について

本願寺派では、ロシアの軍事侵攻により避難生活を余儀なくされているウクライナの人々を支援することを目的に、緊急に「たすけあい運動募金」において標記募金の募集を開始いたしました。

つきましては、募金にご協力いただきますよう、下記の通りお願い申し上げます。

合掌

記

1. 募金の名称 浄土真宗本願寺派 たすけあい運動募金
「ウクライナ緊急支援募金」

2. 受付口座番号

〈郵便振替〉 01000-4-69957

加入者名 たすけあい募金

〈銀行振込〉 銀行 ゆうちょ銀行

店名 一〇九(イチゼロキュウ)店

番号 当座 0069957

名義 たすけあい募金

※通信欄に「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。

編集後記(愚案)

この間の参議院選挙前、安倍元総理が凶弾に倒れたことが報じられました。まさか、この日本だと、驚いたこととありました。直後の報道では政治家は、「民主主義の根幹を揺るがす蛮行」と犯人個人を責めておりました。安倍元総理の近親者の方々にとっては、哀しいことと思いますが、亡くなる直前はどうお思いになっておられたのか。国政よりも自分の健康ですから、「死にたくない」？「我が自民党は永久に不滅です」？「晋三死すとも自由民主党は死なず」？そうであつても仏さまに成られたと思いたいのです。議員の「安倍元総理の意思を継いでいく」という言葉には、未恐ろしい戦慄を覚えましました。また、犯人の動機が明らかになるにつれ、世界平和統一家庭連合(旧統一教会)と政治家との関係が明らかになってきました。安倍元総理の森友加計・桜問題のことを考えると、旧統一教会との繋がりがも領け、この宗教団体からの被害に悩み苦しんでいる渦中、その団体の活動を支持する政治家の無責任さに呆れます。以前、よく足立で、「フアミリーフェスティバル」開催の広告を目にしました。家族の大切さをつたえようとしているんだなあとと思ったのですが、同僚の民生委員さんより、「統一教会よ」と言われ、ショックでした。「平和」「自由」「平等」「安心」という理想的な言葉の文字面に弱くつられやすい私があります。